

# 白内障：なぜ「白内症」じゃなくて「白内障」？

城西眼科

藤澤 邦俊 先生

「白内障」は眼の中の水晶体という、カメラでいうレンズの部分が白く濁る病気です。こんな説明を私はこれまで1万回以上繰り返し手術をしてきましたが、ふと、なぜ「白内症」ではなくて「白内障」なのかと疑問に思いました。

「内障」とは古い仏教用語で「煩惱など心の内部の障がい」を意味します。この語から、(眼球の内部の障がいで)視力の減退する病を「内<sup>ない</sup>障<sup>しょう</sup>眼<sup>がん</sup>」と呼んだのです。病変による瞳孔の色で、白内障、緑内障、黒内障に分類されます。「内障」は熟字なので「白内症」とはならないのです。古名は「底<sup>そこ</sup>翳<sup>ひ</sup>」。白内障は、区別して「白底翳」と呼ばれていました。

また「白内障」は英語では〈cataract〉とありますが、ほかに「大滝、奔流、豪雨、洪水」の意味もあります。ギリシャ語の〈katarraktes〉(滝)が語源で、ラテン語を経て中英語(中世の英語)に入り、これが医学用語で、「白内障」を指す語になったのです。

さらにギリシャ語の〈katarraktes〉は「(城門の)落とし格子」の意味がありました。これが転じて、城門の格子を落として入り口をふさぐように、視野がふさがれてしまう病気の呼称になった、と語源辞典に説明があります。

これらをまとめると、洋の東西を問わず古人たちは「白内障」を「煩惱や邪気などが、頭から(上から)滝のように流れ落ち、眼球を内側から障がいし、徐々に視野がふさがれてしまう病気」と考えていたようです。

最近、なんだか見えにくい、まぶしい、かすむ、老眼鏡がなくても近くが見えるようになったなどの症状がある人は、頭から「煩惱」が流れ落ちてきているのかもしれませんが。幸い現代において「白内障」は治すことができる病気になっています。手術も比較的受けやすく、最近では「遠近両用眼内レンズ」など新しい治療法も出てきています。気になる人は専門医に「おはらい」ではなく「受診」されることをお勧めします。